

氏名(本籍)	石井忠厚(東京都)			
学位の種類	文学博士			
学位記番号	博乙第552号			
学位授与年月日	平成元年11月30日			
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当			
審査研究科	哲学・思想研究科			
学位論文題目	「哲学者の誕生」 ——デカルトの初期思想の研究——			
主査	筑波大学教授	文学博士	工藤喜作	
副査	筑波大学教授	文学博士	澤口昭聿	
副査	筑波大学教授	文学博士	廣川洋一	
副査	筑波大学教授		西澤龍生	
副査	筑波大学助教授	哲学博士	谷川多佳子	

### 論文の要旨

本論文はデカルトの幼少年時代からいわゆる「炉部屋の思索」にいたるまでの期間を中心にして、彼が懐疑の思想を軸に哲学者として誕生するまでの思索を生成史的な観点から考察したものである。

論文全体の構成は要旨、序論、本論、結論からなる。先ず要旨においてこの論文における著者の意図と概要が述べられる。彼が単に炉部屋の思索にとどまってしまったならば、近代の哲学者にはなれなかったであろう。近代の哲学者に脱皮するためには懐疑の方法を用いなければならなかった。それも単なる自然的な懐疑ではなく、方法的懐疑であったことが示唆される。序論の「デカルトの懐疑」は三節に分かれ、第一節において懐疑と方法の結合の問題点、第二節においてデカルトの方法は懐疑をその本質とする「明証性の規則」に還元されることを明らかにし、しかもその懐疑が全面的なものになる必然性を指摘する。そして第三節において『省察』において示される全面的懐疑と Cogito ergo sun の意味を解明するとともに、デカルトの方法的懐疑が「懐疑論的懐疑」や「パース的懐疑」と異なるものであることを明らかにした上で、方法的懐疑の究明には生成史的な考察が必要であると主張する。

本論は三部七章からなる。第一部「訓戒者と私」において訓戒者に従順なデカルトが家族関係において(第一章)、また学校において(第二章)、いかにその従順さを放棄するにいたったかが論じられる。第一章においてデカルト哲学の精神分析=心理学的解釈への批判的吟味がなされ、第二章ではデカルトのうけたイエズス会の学院の教育を問題とする。デカルトがいつ学院に入学し、何年間在学したかについては未だ定説がなく、諸説紛紛としているが、著者は諸説が基づく資料を丹

念に吟味し、その在学期間を明確にする（第二章第一節）。次いで学院教育の実態をカリキュラムの面から考察し、反宗教改革的な目的を社会の要求に適應させつつ、それをいかに貫徹させたか、またそれによって多くの矛盾が生じたことを指摘し（同第二節）、さらにデカルトがこれにいかに対応したかを明らかにする。そして『方法叙説』に示される学問批判がイエズス会の教育の矛盾を反映していることを資料に基づき実証する。かくて従順な生徒であったデカルトがやがて冒険者へと変貌をとげる必然性を論じる（第三節）。

第二部「挑戦者と私」は、デカルトが冒険者となるために、当時のオランダの自然学者ベークマンが挑戦者の役割を果たしたことを指摘し、この挑戦に対する応戦の知的活動において、デカルト自身のおかれた知的状況を明らかにする。この第二部は先ずベークマンとの出会いをリープシュトルプとバイエの証言、そしてベークマンの日記から明らかにする（第三章第一節）。次いでベークマンとの共同研究の成果を「水の容器に及ぼす圧力の問題」（同第二節）と「自由落下の問題」（同第三節）を通して解明する。前者においてベークマンとの出会い以前のデカルトの数学的・自然学的研究の実情を明らかにし、後者において同一問題に対する両者の考え方の差異を明らかにする。つまり、ベークマンが単に自然学者であったに対して、デカルトはベークマンの問題にしなかった自然学の「基礎」を明らかにしようとした点、未だこの時点では明確ではなかったにせよ、デカルトの哲学者としての萌芽が見られると指摘する。

第四章はデカルトがベークマンに贈った『音楽提要』のテキストを紹介し（第一節と第二節）、次いでデカルトの音楽理論の芸術的位置づけを批判的に吟味し（第三節）、この『音楽提要』の主題は算術・数論の自覚的考察であったこと、そして副次的には機械論的自然に対する自我の在り方にも言及されていることを指摘する。以上の第三章と第四章はベークマンとの関係が問題となっているが、この問題における最大の成果は、物理的世界と数学、とりわけ幾何学との関係、そして幾何学が物理的世界の表現であることをデカルトが明白にさせたことであると指摘する。

第五章は「1619年」と題され、この時期におけるベークマンとの往復書簡の吟味を通して、デカルトの消息を明らかにする（第一節）。次いで軍人としてのデカルトの学習活動の内容と彼の手帖に記された著作予定の吟味など、そしてデカルトがこの時期に意図した「全く新しい学」が解析幾何学であったことを『思索私記』と手帖によって明らかにする（第二節）。またこの時期にデカルトは旅行をしているが、その動機がいったい何であったかを先行研究の仮説を吟味しながら探究し、知的冒険者としてのデカルトが健全であることを確かめる（第三節）。だがこの時期はデカルトが研究者と軍人の二つの立場に立っていたため、未だ哲学者としての「回心」のときにいたっていないことを明らかにする。

第三部「炉部屋の私」は方法的懐疑の前提としての「私」（自我）についての新理解が1619年秋にいたって生じたことを明らかにする。このため『オリンピカ』のテキストが検討される。このテキストの原本は現存しないが、この現物を実際に読んだバイエの訳と解説、同じくこれを読み抜粋したライプニッツの記事、またこれに関するデカルト自身の『思索私記』から『オリンピカ』を批判的に再現する（第一節）。次に、この『オリンピカ』における「驚くべき学問」とは何であるかを、

「炉部屋」にいたるまでの彼の思索の歩み、『方法叙説』からのアプローチ、「夢」のテキストの検討から吟味し、それが普遍学であることを明らかにする。同時に、イタリアの自然哲学、さらにオカルティズムを思わせる彼の表現の背後にあるものが、ルネサンス的なものとして理解されるより、むしろ機械論的自然に対して自由な「私」の発見であったことを明らかにする。

第七章「炉部屋の一日」は『方法叙説』のテキストの読解を中心に、今までの研究成果をふまえつつ、1619年11月10日の炉部屋の思索を再現する。同時に『方法叙説』が思索の成果でないとして無視した「夢」の出来事を解釈し、11月10日の昼の思索と夜との関係を当うことによって、カルテジアニズムの生成における炉部屋の意義を明らかにする。そして「夢」の新たな解釈によってその正体が懐疑の挫折にはかならないことを明らかにされ、その負債の返済こそカルテジアニズムの成立にはかならないと結論する。

結論の「デカルトの懐疑」は今までの本論の展開を懐疑の観点から新しい指摘をまじえつつ、整理し直し、まとめたものである。ここで新たに問題となったことは、懐疑が方法的となることによって良識の成熟、つまり、良識の自覚の深化がなされ、ついに「信仰」との対決を決意するにいたったことである。懐疑は感覚、想像力を疑い、さらに数学の確実性すら問題にしたのであるが、ここにいたって全能の神への信仰に対する懐疑となり、それとの全人的な対決となったこと、そしてこれを徹底することによって自己に反逆する自由を被造物に贈与し、しかもこの反抗すら許容する創造神、自己の被造物との間にどこまでも自由な交わりを求める絶対的存在者に出会うことができた結論する。

## 審 査 の 要 旨

著者は多年デカルト研究に従事し、方法的懐疑におけるカルテジアニズムをテーマに、その初期思想について研究してきた。本論文はその結晶である。そしてこれはデカルトの幼少年時代から「炉部屋の思索」にいたるまでを重点に、本邦においては未紹介の『音楽提要』、また『オリンピカ』の批判的再現を行いながら、彼の初期思想を生成史的観点から実証的研究を行った力作であり、労作である。資料に手堅く、丹念にあたり、詳細な論述を展開したこの研究によって、初めて明らかにされたものも少なくなく、この意味では今後この分野のデカルト研究に大きな貢献を果たすことであろう。それだけに公刊の暁には関係方面の注目を浴びることは必定である。ところが本論文の叙述と表現の仕方には難があり、重複の箇所があると同時に章と節の連結具合が必ずしも円滑でないため、読みにくい面があることも否定しえない。この点著者の今後の留意と研究に俟つところ大である。

以上、本論文は多少の不備もあるが、全体としてみれば、デカルトについての著者の多年にわたる綿密かつ手堅い研究の成果として学界に新風を吹き込むところ大であると認められる。

よって著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。